白村江の戦いから古代山城、天智天皇即位、庚午年籍へ

浅野啓介

Ⅰ　はじめに

以前に、私は白村江の戦いの概説を記す機会を頂いたが[1]、その執筆過程で、白村江の戦いが内政に与える影響、具体的には白村江の戦いと天智天皇の即位との関係、庚午年籍との関係について気になる点が生じたため考察していきたいと考える。白村江の戦いから、古代山城の築城、天智天皇の即位、庚午年籍などの著名な歴史的事象を、これまでの研究を踏まえつつより有機的にとらえてみたい。

Ⅱ　白村江の戦いと天智天皇の即位

中大兄皇子が、斉明が斉明７年（661）に亡くなった後もすぐに即位せず、天智７年（668）まで即位しなかった理由については様々な説がある。森公章氏によれば、中大兄皇子が称制を続けた理由として、①敗戦後の防衛政策を進めるうえで天皇として即位するより皇太子として自由な立場で強力に政治を行うため[2]、②天智４年（665）２月の間人皇女死去、６年（667）２月の斉明と間人の小市岡上陵への合葬を経て、７年（668）正月に即位するので、間人皇女が障害になっていたため[3]（後述）、③乙巳の変や古人大兄殺害など、中大兄の血塗られた足跡が一因であるため、④二段階即位説[4]、⑤中大兄は大友皇子を後継者と考えており、その成長を待っていた[5]、などが挙げられている[6]。

森氏はこれらのうち、①、③～⑤について否定的な見解を述べ、②の間人皇女の存在に注目する。白村江戦後の諸課題への対応と、中大兄即位までの確実な基盤作り（年齢問題も含めて）の時間を得るために、前皇后である間人を表に立てて、斉明→間人→中大兄の権力維持が求められ、「仲天皇」としての間人の存在が不可欠であったと考えてみたい、としている[7]。森氏は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』に現れる「仲天皇」を間人とし、野中寺弥勒像台座銘の「天皇」を間人としている。ただ、大平聡氏によれば、『万葉集』に出てくる「中皇命」は間人皇女ではあるものの、『大安寺縁起』の「仲天皇」は間人ではなく、斉明その人であると述べており[8]、意見が異なっている。まずは、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』の該当部分を検討する。

天皇将崩賜時、勅二太后尊一久、此寺如レ意造建、此事為レ事給耳。爾時後岡基宮御宇天皇造レ此。寺司阿倍倉橋麻呂、穂積百足二人任賜。以後、天皇行二車（幸カ）筑志朝倉宮一、将崩賜時、甚痛憂勅久、此寺授レ誰参来止、先帝待問賜者、如何答申止憂賜支。爾時近江宮御宇　天皇奏久、開伊髻墨刺乎刺、肩負レ鉦、腰刺レ斧奉レ為奏支。仲天皇奏久、妾毛我妖等、炊女而奉レ造止奏支、爾時手柏（拍）慶賜而崩賜之。[9]

現代語訳をすると、（舒明）天皇が崩じようとする時、太后尊（舒明の妻である皇極・斉明）におっしゃるには、「この寺は意のままに造営せよ。このことに専念なされよ」。その後、後岡基宮御宇天皇（斉明）はこの寺を造り、寺司阿倍倉橋麻呂、穂積百足の二人を任命した。以後、天皇（斉明）が筑志朝倉宮に行幸し崩じようとする時、とてもつらそうに憂いておっしゃるには、「この寺を誰に授けて参って来たかと先帝（舒明）が（あの世で？）待っていて問われたら、いかに答えようか」と憂いなさった。その時、近江宮御宇天皇（天智）は「開[10]は髻（たぶさ）に墨刺を刺して、肩に鉦（りゅう）を負い、腰に斧を刺してつくり申しあげる」と申した。仲天皇は、「妾も我妖と、炊女としてお造りもうしあげる」と申した。そして、手をたたいて慶びたまい崩じた。

この「仲天皇」が誰なのかについては、天智の妃倭姫王、持統、間人など様々な説がある[11]。水野柳太郎氏は『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』を分析し、現れる天皇を一覧表にしているが[12]、その一覧表によると、仲天皇を倭姫王や間人に比定した場合、その仲天皇は縁起においては実際に何も造営したことにはなっておらず、また仏像・調度・資産などを施入した記録もない。したがって、この史料で倭姫王なり、間人なりの発言だけを取り上げる理由があまりないように思われる。その点、斉明（袁智天皇）であれば繍仏を施入しており自然である。仲天皇が天智の妃倭姫王、持統、間人とするならば、斉明が手をたたいて喜ぶ理由が明確でなくなると考える。

また、森氏は法隆寺金堂薬師仏造像記が天皇の病気→死去→死後の造像という流れで記されていることから、野中寺のほうも同じようにその流れをとると考えているが[13]、野中寺のものは病気のことが記されているだけなので、死去していない場合もあると思われる。この銘文については森氏が述べているように解釈にも諸説あり、間人の即位の可能性も残るが、また一方でこれだけで確定できるわけでもないと思われる。

さらに、間人皇女が亡くなったのが天智４年（665）２月であり、６年（666）２月に斉明とともに合葬になるのだが、間人の死去後に中大兄が即位すればよいのにしなかったということは、間人の存在は、中大兄が即位しなかったこととは直接関係ないのではなかろうか。また、間人が即位したのであれば『日本書紀』は間人皇女のことをもっと記すのではないだろうか。やはり、間人の即位をいうのであれば『日本書紀』に記されなかった理

由を説明する必要があろう。そして、間人皇女は中大兄の妹と考えたほうがよいので[14]、中大兄の年齢が即位の障害であったということはない。また、斉明の殯の期間については歴代天皇を見た場合に、敏達と並んで長く[15]、中大兄の即位を伸ばすために殯を長くしていたと考えておく。

先述したように、これだけの理由が挙げられながら、中大兄が即位しなかった理由の明確な決定打が見つかっていないのだが、『日本書紀』によれば、天智天皇の即位については、「七年春正月丙戌朔戊子、皇太子即二天皇位一。（或本云、六年歳次丁卯三月即位。）」と二説記されている。６年（667）３月即位説は近江への遷都と同一時期のもので、宮の登場と即位を同一時間にする帝紀の書き方に則っているという[16]。即位の時期が二説あるということは、近江への遷都のタイミングで即位したと考える人々も存在したという意味で、誰もが天智の即位の時期を鮮明に覚えていたという状況ではないのであろう。

そこで、天智の即位前後の『日本書紀』の記載内容に注目する。白村江で敗れた後の同年の記録が『日本書紀』にはないが、翌年には防人を置き水城を造り終わった。３年（664）２月条の民部を置くなどの甲子宣の記事以外は軍事的なことと外交関係や百済遺民の記事しかほぼないが、即位後は、群臣との内裏での宴（７年（668）正月壬辰条）、立后（２月戊寅条）、５月５日に大海人皇子・諸王・内臣・群臣らとともに行った蒲生野での狩り、そして同年あたりには近江国で武が講ぜられ、多く牧が設置されて馬が放たれ、蝦夷との饗宴があり、舎人に命じて所々で宴をするなどの記事がある（７月条）。翌８年（669）５月５日にも大海人皇子らと山科野に狩りに行っているし、同年８月には高安嶺に登って築城をやめている。これは、要月での作業を止めるという意味である可能性が高いものの、６年（667）11月是月条には、高安・屋嶋・金田の各城を築くと記されているなかでのことである[17]。明らかに、即位前と即位後で緊張感が異なるとすべきであろう[18]。そうなると、天智天皇即位の理由を外交から考えるのはいかがであろうか。

それでは、それまでの倭国は唐に対してどのように考えていたのか。すでに書いたものと重複する部分もあるが確認しておきたい[19]。まず斉明天皇が百済を救うために半島に派兵を決断した際の史料である。『日本書紀』斉明６年（660）９月癸卯条には、

百済、遣二達率（闕レ名）・沙弥覚従等一来奏曰（或本云、逃来告レ難）「今年七月、新羅恃レ力作レ勢、不レ親二於隣一。引二搆唐人一、傾二覆百済一。君臣総俘、略無二噍類一。（或本云、今年七月十日、大唐蘇定方、率二船師一、軍二于尾資之津一。新羅王春秋智率二兵馬一、軍二于怒受利之山一。夾二撃百済一相戦三日、陥二我王城一。同月十三日、始破二王城一。怒受利山、百済之東堺也。）於レ是、西部恩率鬼室福信、赫然発憤拠二任射岐山一（或本云、北任叙利山）。達率余自進、拠二中部久麻怒利城一（或本云、都々岐留山。）各営二一

所一、誘二聚散卒一。兵尽二前役一、故以レ棓戦。新羅軍破、百済奪二其兵一。既而百済兵翻鋭、唐不二敢入一。福信等、遂鳩二集同国一共保二王城一。国人尊曰、佐平福信、佐平自進。唯福信、起二神武之権一、興二既亡之国一。」

百済からの使い（達率（百済の官位）十六階の二位の某と僧の覚従）によれば「今年七月に新羅が唐人を引き込んで百済を傾け、王や臣下を皆俘虜とした。ここで、百済西部にいた恩率（百済の官位十六階の三位）の鬼室福信が怒って任射岐山を拠点とし、達率余自進は百済中部の久麻怒利城を拠点とし、百済のばらばらとなった兵を集め、武器はすでになくなっていたので棒を持って戦った。新羅の軍を破り百済はその兵を奪った。唐は敢えて介入してこない。福信たちはついに百済の国を集め、ともに王城を保持している。百済の国の人々は尊敬して佐平（百済の官位十六階の一位）福進、佐平自進と呼ぶ。ただし福信のみは神武の権を起こしてすでに滅んだ国を興した、という意味になる。

実際に、それはそれほど誇張した表現ではなく、旧百済軍は９月23日には泗沘に侵入し、城内の人々を誘拐しようとしたり、泗沘の南嶺に柵を作り、軍隊を駐屯させ、彼らに呼応する者が二十余城になった（『三国史記』新羅本紀太宗７年（660）９月23日条）。さらに、10月には福信本人が倭に佐平貴智等を派遣してきて、唐俘一百餘人を献上した（『日本書紀』）。唐は敢えて介入してこない、というのは重要と思われ、この前にも後にも、倭の史料には百済を助ける、新羅と戦うという文言は見えるが、唐と戦うという文言は見えない。このように、倭は、直接、唐と戦うことを考えていなかったと思われる[20]。

その後も、唐は661年（斉明７、唐龍朔元年、新羅太宗８年・文武王元年）４月（『新唐書』高宗本紀龍朔元年４月庚辰条、『旧唐書』高宗本紀上は５月丙申条）蘇定方らに高句麗を攻めさせ、５月には高句麗が靺鞨と組んで新羅に攻め込んでくる（「新羅本紀」太宗８年５月９日条）など、唐・新羅と旧百済の戦いは一進一退の状況であった。さらに６月には新羅王金春秋が亡くなる（同６月条）。７月に新羅は王族の金庾信を大将軍に任命し高句麗へ軍を差し向け（「新羅本紀」文武王元年７月17日条）、８月には唐の蘇定方らが高句麗の首都平壌城を包囲した。しかし寒波によって翌662年３月までに退却する（『新唐書』東夷伝高麗、龍朔元年８月条、『旧唐書』高宗本紀上龍朔２年３月癸丑条、劉仁軌伝、『三国史記』高句麗本紀宝臧王21年条、『日本書紀』天智即位前紀12月条）。その一方で新新羅王金法敏自らが旧百済軍と戦っていた（「新羅本紀」文武王上元年（661）９月19日条）。まさしく福信の言うとおり、百済との戦いには唐はほとんど入ってこられない状況であった。

この戦況が変わるのが、唐の方針転換である。『旧唐書』巻84劉仁軌伝を引用する。

高宗敕書与二仁軌一曰「平壌軍廻、一城不レ可二獨固一、宜レ抜下就二新羅一、共中其屯守上。若金法敏藉卿等留レ鎮、宜二且停一レ彼。若其不レ須、即宜二泛レ海還一也。」将士咸欲二西帰一。仁軌曰「春秋之義、大夫出レ疆、有レ可レ以下安二社稷一、便中国家上、専レ之可也。況在二滄海之外一、密二邇豺狼一者哉。且人臣進レ思尽レ忠、有レ死無レ貳。公家之利、知レ無二不為一。主上欲レ呑二滅高麗一、先誅二百済一、留レ兵鎮守、制二其心腹一。雖二妖孽一充レ斥、而備預甚厳、宜下礪二戈秣馬一、撃中其不意上。彼既無レ備、何攻不レ克。戦而有レ勝、士卒自安。然後分レ兵拠レ険、開二張形勢一、飛レ表聞レ上、更請二兵船一。朝廷知二其有一レ成、必当二出レ師命一レ将、声援纔接、凶逆自殲。非三直不レ棄二成功一、実亦永清二海外一。今平壌之軍既廻、熊津又抜、則百済余燼、不日更興、高麗逋藪、何時可レ滅。且今以二一城之地一、居賊中心、如其失脚、即為二亡虜一。抜二入新羅一、又是坐客、脱二不如意一、悔不レ可レ追。況福信兇暴、残虐過甚、余豊猜惑、外合内離、鴟張共処、勢必相害。唯宜二堅守観レ変、乗レ便取レ之、不一レ可レ動也。」衆従レ之。

662年３月の蘇定方らの高句麗からの退却後に、唐の皇帝高宗が朝鮮半島で戦っている劉仁軌に勅書を送り、「平壌に向かっている軍が帰ったら、一城（熊津のことか）を一人では守ることができない。だから新羅とともに守るように。もし金法敏（新羅王）らが、戦場に留まるのならばとりあえずそこに留まるべきだが、もしも新羅に帰るということであれば、海を渡って帰るように。」と伝え、唐軍はみな帰りたいと思うようになった。それに対し劉仁軌は「高句麗を滅ぼそうと思うのならば先に百済を滅ぼすべきです。だからさらに兵を乞います。平壌の軍が帰り熊津を退却すれば百済の余燼はすぐに復活し高句麗も勢いが高まりいつ滅ぼせるかわからなくなります。賊の中心は一城であり、そこを失えば亡虜となるでしょう。まして福信は凶暴残虐で、余豊は疑い深く外では合っているように見えて内側では離れています。勢いがあるように見えてその勢いは必ずお互いを傷つけるでしょう。」と言い、皇帝の命令に異議を唱えた。劉仁軌の皇帝に異を唱える献策によって、唐は高句麗を滅ぼすのであれば先に百済を滅ぼすべきとなり、大規模な軍を百済に派遣することになった。

その後白村江での戦いを経て倭の敗戦となるのであるが、その敗戦の情報は、敗北後のその年の記事は『日本書紀』には記述はないものの、大海人ら（中大兄が斉明崩御後に九州に戻ったなら彼も）は、命からがら倭（九州か）に帰ってくる倭人や百済人を見て敗戦を知ったはずである。そして、唐軍との戦力の違いも理解したであろう。翌664年（麟徳元・天智３）には防人を置き水城を造り終わったようなので（『日本書紀』天智３年是歳条。以下の記載は特に記載がない場合は『日本書紀』が典拠である）、倭は唐からの相当の脅威を感じ

ていたと思われる。林重徳氏によれば、水城を造るのに、１年間を通して１日3200人の労働力を必要とした[21]。

その後の流れを唐からの情報に注目しつつ述べていきたい。天智３年（664）５月には百済鎮将劉仁願が朝散大夫郭務悰を派遣した。このときのことは、『善隣国宝記』に詳しく書かれているが、倭は、郭務悰らが唐皇帝の使いではなく、百済鎮将からの私的な使いであるとして、本当は都からの「勅」をもらっているにもかかわらず、筑紫大宰の辞として唐側に返答して、帰国させた[22]。倭は郭務悰を追い返したということではなく、外交の基礎知識を利用してギリギリの対応をしたということになろう。もしも入国させたなら、倭国内の混乱が劉仁軌に伝わってしまうと思われる。

しかし、翌唐麟徳２・天智４年（665）年９月にも唐国の使いが254人やってきたので、今回は倭は受け入れざるを得なかった。この時は中臣鎌足の長子定恵が唐から同じ船で帰国したと考えられるし、『懐風藻』（淡海朝大友皇子）によれば、唐使劉徳高が大友王子と交流したとみられるように、唐国の使いと倭国の中枢の人々との交流があった[23]。この時に、麟徳元・天智３年（664）７月には、唐高宗が麟徳３年（666）正月に泰山で封禅の儀を行うことを宣言したので（『新唐書』高宗本紀７月丁未条）、この情報が倭に伝えられられた可能性が高い。唐使劉徳高が唐に帰るのと対応して、同じ年に遣唐使が派遣されている。ただし、この時の遣唐使は天智４年是年条での記載で、また、注に「蓋送二唐使一人乎」と書かれており、『日本書紀』の原資料にもはっきりとしたことが書かれていなかったと思われる。

この後の唐からの情報としては、天智６年（667）11月乙丑条が挙げられる。百済鎮将劉仁願が熊津都督府の役人司馬法聡等を派遣して、境部石積等を筑紫都督府に送り届けてきた記事である。この石積は天智４年（665）に守大石と遣唐使として派遣されている（天智４年是歳条。ただし、白雉４年５月条によれば、坂合部連磐積は学生として唐に派遣されているから、それ以来唐にいた可能性の方が高い）。彼らは翌666年（麟徳３）正月に行われた唐の泰山での高宗の封禅の儀には間に合わなかったかもしれないが、すでに朝鮮半島に留められていた人々については、『旧唐書』劉仁軌伝によれば、

> 麟徳二年、封二泰山一、仁軌領二新羅及百済、耽羅、倭四国酋長一赴会、高宗甚悦、擢拝二大司憲一。

とあって、劉仁軌が新羅・百済、耽羅、倭の四国の酋長を熊津から率いて泰山を訪れて、それを高宗がはなはだ喜び、これまで帯方州刺史であった劉仁軌は大抜擢されて中央官である大司憲となったと伝えている。また、葛継勇氏によれば、倭国の遣唐使たちは正月の

封禅の儀に間に合わなかったが、２月中旬まで関連儀式が続いたことから、泰山に登って儀式に参加した[24]。この儀式の参加の中で唐皇帝が現状をとても喜んでおり、倭人は、唐が倭に攻めてこないことが分かり、それを日本に伝えたのではないだろうか。『日本書紀』の記事が天智の即位前後で緊張感が異なることの表れは、唐側が倭を攻めてこない情報だったと考えられる。天智８年（669）是歳条によれば、遣唐使を派遣しており、これが、『新唐書』東夷日本伝に、「咸亨元年、遣レ使賀レ平二高麗一」（670）とあって、日本から唐の高句麗平定を慶賀する使いが派遣されている。唐朝に恭順の意を示したのであろう[25]。そして、天智10年（671）11月条によれば、突然訪れて防人を驚かせて戦になっては困るので、唐の使いは先に対馬に使いを出しており、明らかに唐は倭を攻めるつもりがないことが分かる。

以上、天智天皇の即位の時期については、唐との関係が影響していることを述べてきた。中大兄は唐が倭に攻めてこない情報を得た上で即位したと言えるだろう。即位した年には、百済、高麗、新羅が使いを派遣しているが、即位をすれば、唐などの外国に即位が伝わることとなり、唐を刺激する可能性があったと思われる。

Ⅲ　『日本書紀』記載の古代山城

さて、中大兄が即位ができないほどの緊張感・緊迫感の中で古代山城が造られたと考えられるが、古代山城には、記録に出ているものとそうでないものがある。これについて狩野久氏は、『日本書紀』の編者は大宝令制で廃止となった総領関係の城を採用しなかったとしている[26]。その理由として、出宮徳尚氏が『日本書紀』天智６年（667）11月是月条「築二倭国高安城・讃吉国山田郡屋嶋城・対馬国金田城一」を分析し、屋嶋のみ郡が書かれており、郡名を付す必要性は茨城や常城（『続日本紀』養老３年（719）12月戊戌条「停二備後国安那郡茨城・葦田郡常城一」）と同様に近接地に城があったからであり、讃吉国には当時から屋嶋とは別に城山があったことを推定した[27]ことをあげている[28]。その上で狩野氏は、その背景には政府の公的記録として城柵帳があり、瀬戸内山城についてもそれなりの記録があったと思われるとしている。このことから、『日本書紀』の編者は大宝令制で廃止となった総領関係の城を採用しなかったとの推論を導いている。ただ、屋嶋にだけ郡名があることだけで、城山が完成していて、しかも『日本書紀』の編者がほかの城を把握していながら掲載しなかったといえるだろうか。

まず、天智６年11月是月条についてさらに考えてみたい。屋嶋だけに郡名が記されていることについては、逆に他の二つに郡名が書かれていないことに注目したい。高安城は一郡あるいは一国では収まらないので郡名は表記できないだろうし、対馬島は西海道であり、

その西海道で天智期にどの程度評制が敷かれていたかどうか考える必要がある。『日本書紀』で西海道の郡（あるいは評）の初見は持統４年（690）９月丁酉条の「上陽咩郡」である。また、『日本書紀』天武６年（677）11月己未朔条によれば、「雨、不二告朔一。筑紫大宰献二赤烏一。則大宰府諸司人賜レ禄各有レ差。且専捕二赤烏一者賜二爵五級一、乃当郡々司等加二増爵位一。因給二復郡内百姓一以二一年一之。是日、大二赦天下一。」とあるのに対して、『日本書紀』天武２年（673）３月壬寅条で、「備後国司、獲二白雉於亀石郡一而貢。乃当郡課役悉免、仍大二赦天下一。」で当時備後国はできていないが備後国と記し、亀石郡を記した後に当郡と記している。天武６年の大宰府の方はここまで詳細に記していて郡名が記されていないのは不自然ではないだろうか。また、早川庄八氏によれば、庚午年籍が西海道における令制国の成立以前に造られた可能性を示唆しており[29]、瀬戸内海諸国の評（郡）と同様に、西海道における評（郡）が成立していると直ちに考えるのは慎重でありたい。そして、山田郡の場合は、屋嶋が海に飛び出ている関係で、三木郡（評）の境が明瞭だったと考える。高松平野の郡は直線郡境で、駅路の測設時期は７世紀後半～末頃と推定されており[30]、天智６年当時郡名を記すことができたと考えられる。

また、香川県坂出市に所在する古代山城である城山については、城壁が全周しない未完成の可能性がある山城として取り上げられ、また唐居敷が製作途中であり、まさに築城途中で止まっている[31]。郡名が記載されているからといって讃岐に二つの城があったことをこの記事から読み取ることができないと考えられる。したがって、『日本書紀』に敢えて載せなかった古代山城があるとは、直ちには言えないだろう。

次に、『日本書紀』の天智紀全体に目を向けたい。坂本太郎氏の「天智紀の史料批判」の冒頭には、天智天皇の年紀は、称制の年から数える仕方と即位の年から数える仕方があり、また、天智７年（668）正月戊子条の即位記事分注に引かれた或本には６年３月即位とする史料があり、即位年にも複数説が見られる、とする[32]。ここで、古代山城築城に関する資料を掲げる。

『日本書紀』天智４年（665）８月条

遣二達率答炑春初一、築二城於長門国一。遣二達率憶礼福留・達率四比福夫於筑紫国一、築二大野及椽二城一。耽羅遣レ使来朝。

『日本書紀』天智９年（670）２月条

造二戸籍、断二盗賊与浮浪一。于時、天皇、幸二蒲生郡匱迮野一而観二宮地一。又修二高安城一積二穀与一レ塩一、又築二長門城一・筑紫城二一。

両者には５年の間があるが、天智７年即位説では数字が合わないものの、天智６年即位説

だと、称制４年と即位４年ということになるので、長門と筑紫に城を築くという両者の記事は重複と考える[33]。

また、須原祥二氏は、書紀編者は、原史料から抽出した記事の間に基本的な矛盾がなければ、スムーズに通読できるように字句を整えたり記述内容を調整したりする作業を敢えて行っていないとしている[34]。この須原氏の見解を踏まえると、「築長門城一・筑紫城二」という記事自体は『日本書紀』を編纂する際の現史料にあったと考えられる。それをそのまま採用したということは、日本書紀編者は城の名前に特段の関心がなかったことを示している。まして、その城が大宝年間に廃止されているか機能しているかということまでは考えていなかったと考えられる。つまり、城が『日本書紀』に出てくるかこないかは、史料があったかなかったかということであると思われる。鬼ノ城は吉備大宰の城、石城山は周防総領の、讃岐城山は伊予総領の府だと考えられているが[35]、大野城などのように中央から百済官人を派遣して築城した場合には史料が残った。『日本書紀』に掲載されているかされていないかは、中央政府が築城を命令したものと、大宰が中心となって城の位置等を設定したものとの違いととらえるべきと考える。

Ⅳ　古代山城の位置・戦術

古代山城の『日本書紀』への記載具合を検討したが、続いて古代山城の位置や戦術について考えてみたい。山城の代表である大野城の立地については、赤司善彦氏の見解を取り上げておきたい。「高い山に山城を構えて陣取っても、平地の敵兵はその山をスルーして、横を通っていけばいいじゃないかという人がいます。実はそんなことをやっても意味がないのです。仮に新羅や唐の軍隊が上陸してきて、福岡平野の奥にある大野城をスルーしても、では彼らはどこに行けばいいのでしょうか。近畿を目指す道をして居る（知っている）のでしょうか。そもそも近畿がどこかも知らないと思います。手引する人がいてもどうやって物資や進むルートを確保できないと思いますし、道を進んでも夜に大野城から降りてきた兵士に背後を突かれたら大混乱です。戦では兵力と兵力を使って相手の兵力をつぶさなければなりません。地勢に明るくない海外の兵団が、九州北部の山城や軍団のいる拠点をスルーすることはないと思います。机上のゲームではないのでスルーするという発想がないと思います。」[36]私はこの見解を支持する。

そして、なぜ山城を造るのかについては[37]、『日本書紀』天武元年（672）６月丙戌条に

男、至二筑紫一時、栗隈王、承レ符対曰「筑紫国者、元戍二辺賊之難一也。其峻レ城深レ隍臨レ海守者、豈為二内賊一耶。今畏レ命而発レ軍、則国空矣。若不意之外有二倉卒之

事一、頓社稷傾之。然後雖二百殺一レ臣、何益焉。豈敢背レ徳耶、輙不レ動レ兵者、其是縁也。」

とあって、壬申の乱に際して大友皇子側が送った使者に対しての筑紫大宰栗隈王の言葉として、城を高くし堀を深くし海を望んで守るのは、外国の敵から守るためのものであることが明記されている。

続いて、どのような城が望ましいかを推察できる資料として、『同』天智元年（662）12月丙戌朔条と翌2年2月条には

百済王豊璋・其臣佐平福信等、与二狭井連（闕レ名）・朴市田来津一議曰「此州柔者、遠隔二田畝一、土地磽确、非二農桑之地一、是拒レ戦之場、此焉久処、民可二飢饉一。今可レ遷二於避城一。々々者西北帯以二古連旦涇之水一、東南拠二深泥巨堰之防一。繚以二周田一、決レ渠降レ雨、華実之毛、則三韓之上腴焉。衣食之源、則二儀之隩区矣。雖レ曰二地卑一、豈不レ遷歟。」於レ是、朴市田来津独進而諫曰「避城与敵所在之間、一夜可レ行。相近茲甚。若有二不虞一、其悔難レ及者矣。夫飢者後也、亡者先也。今敵所三以不二妄来一者、州柔設二置山険一、尽為二防御一、山峻高而谿隘、守易而攻難之故也。若処二卑地一、何以固居、而不二搖動一、及二今日一乎。」遂不レ聴レ諫、而都二避城一。二年春二月乙酉朔丙戌、百済、遣二達率金受等一進レ調。新羅人、焼二燔百済南畔四州一、幷取二安徳等要地一。於レ是、避城去レ賊近。故勢不レ能レ居。乃還居二於州柔一、如二田来津之所一レ計。

とある。まず州柔は田畝に遠く農桑の地ではなく、戦いを拒む場であり、長くいれば民は飢えてしまう。だから避城に遷ろうということになった。それに異を唱えていた朴市田来津は「夫飢者後也、亡者先也」と言い、まずは守った後飢えを何とかするべきであるとしていた。しかし田来津の意見は採用されず、避城に移った。その後、二ヶ月たって、結局避城は賊に近いということで州柔に戻ったという。ここでは、城の条件として、当時の戦いにおいては防御と食糧確保、両者のバランスが大事であったことを読み取るべきである。

防御と食糧確保については、おそらく高安城で実践していると思われる。天智6年（667）の築城の史料があった後、天智8年（669）には8月に修理しようとするがやめており、12月に畿内の田税を収め、天智9年（670）には穀と塩を積んでいる。築城の過程としては第一段階として防御を固め、防御を固めた後に食料を納めたのであろう。

これに関して、狩野久氏は天智9年（670）に作成された庚午年籍について、『日本書紀』（同年2月条）には盗賊と浮浪を断つと書かれており、浮浪は徭役拒否の行動であるから当

然として、盗賊を造籍の事由としているのは、高安城に備蓄物が多いことなど、規模の大きな籠城型の城はさまざまな物資を蓄える倉の多いのが特徴であるから、このことに関係していよう、としている[38]。狩野氏が取り上げたのは高安城の例のみであり（もちろん『日本書紀』に他の例はないのであるが）、庚午年籍は全国で作られたものであり、城に物資が備蓄された、あるいはされるべきであったのは高安城のみではなかったと考えたい。

以上のように戦術における防御と食料確保について考えようとするとき、思い浮かぶのは鞠智城が有するといわれる兵站機能である。鞠智城は築城の記事はなく、前節で確認したことによれば中央からの築城の指示はなかったと思われるが、『続日本紀』文武２年（698）５月甲申条によれば「令三大宰府繕二治大野基肄鞠智三城一」と記されて、修理されたことが分かっている。前の二城が天智４年（665）に築城の記事があることから、鞠智城も同じ頃築城されたと考えられている[39]。天智４年の頃は中央から命じられて築城されなかった鞠智城は、なんらかの理由で中央から命令して造る城に格上げされたと思われる。

鞠智城の築城理由についてはいくつか挙げられており、木村龍生氏によれば、これまでの研究では有明海侵入敵の確認と伝達、大宰府非常に備えるための物資・兵器の蓄え、九州南部の熊襲族に対する重鎮を挙げつつ、有明海の防衛については、鞠智城から有明海は直接視認できないことなどから、否定的な見解を示し、また、隼人対策についても、球磨地域・天草地域が古墳時代後期以降には、それ以北と同じ古墳文化をもち、中央政権の影響下に組み込まれていたことを述べ、隼人の反乱が大隅や薩摩周辺でのみ起こっていることから、こちらも否定している。そして、鞠智城の築城の目的は、交通の要衝かつ穀倉地帯であった菊鹿盆地を抑え、物資を貯蓄し、必要に応じて大宰府あるいは肥後国府などへ、その物資を運搬することであったとするのが最も現実的としている[40]。大宰府の支援についてはその通りと考える。五十嵐基善氏も、鞠智城は兵站機能を発揮させるため設置され、生産力の高い菊鹿盆地に築城され、収蔵・出給に適した米原台地が選ばれたものと考えられるとしている[41]。

さて、鞠智城の繕治が行われた文武２年（698）は、高安城の修理（８月丁未）、越後国の石船柵の修理（12月丁未）が行われた。文武３年（699）には９月丙寅に高安城の修理、12月甲申に大宰府の三野・稲積城の修理、４年２月己亥には越後・佐渡の二国に石船柵を修営させるなど、各地の城が修理されている。森氏はこの鞠智城の記事を南方との関係で理解をしている[42]。しかし、鞠智城が大野・基肄の二城と並列されていることを重視したい。『続日本紀』に掲載されているということは、天皇あるいは太政官からの繕治の命令があったと考えられ、この三城を放置しておけばこれらの城の築城目的が果たされなくなることへの心配がこの命令を発出する際には述べられただろうと推定する。大野・基肄の二城と一緒に修理されているということは、中国からの来襲を想定していると考える。し

かも大野・基肄の二城と一緒に築城されたはずの長門の城が現れず、鞠智城が入っている。他にいくつも古代山城がある中で鞠智城が選ばれたのは、防御と食料確保の観点から考えて、鞠智城は兵站基地の城として、遅くともこの頃までに中央に把握されていたからであると推定する。

なお、鞠智城については井上和人氏や五百旗頭真氏が、大宰府が落ちた時の最後の拠点と考えているが[43]、大宰府が落ちた際には、唐軍が大宰府を支配することになる。その場合には、大宰府の周囲の城を拠点として、ゲリラ的に攻撃を続けることにより、畿内を攻めていく唐軍の注意を少しでも削ぐ計画であったのであろう。

最後に、表題にも取り上げた庚午年籍について触れておきたい。庚午年籍は唐の来襲の危険が少し薄れ、天智天皇の即位の後の初めての大きな内治作業といえる。また、狩野氏の見解を敷衍すれば、全国的に、主に西日本は食料の備蓄を行っており、庚午年籍の作成目的はそれの盗賊対策もあったと考えられる。

V　おわりに

白村江の戦いから古代山城の築城、天智天皇の即位に至る歴史の流れを述べてきた。天智天皇の即位については、唐が攻めてこないことが分かってからの即位となった可能性が高いこと、それだけの外圧があるからこそ山城が築城されることになったこと、『日本書紀』に掲載された古代山城は中央に残っていた資料に記載された城であったと考えられること、唐の来襲に備えた戦術としては、まずはとにかく水城・大野城・基肄城で抑えようとするものであり、これに鞠智城を加え防御と食料確保を双方重視したこと、庚午年籍が、外圧が少し薄らいだあとの内治作業であったことなどを述べてきた。

註

1　浅野啓介　2019「白村江の戦い」佐藤信編『古代史講義【戦乱篇】』　ちくま新書
2　小林敏男　1987「称制考」『古代女帝の時代』　校倉書房。初出1982　p.152。また、熊谷公男氏は、中大兄の七年間の称制は多分に政治戦略だったとしている（熊谷公男　2001『日本の歴史03　大王から天皇へ』　講談社　p.316）。
3　遠山美都男　1999『天智天皇―律令国家建設者の虚実』　PHP新書　p.199
4　河内春人　2015「天智「称制」考」『日本古代君主号の研究―倭国王・天子・天皇』　八木書店。初出1982
5　中西康裕　1999「中大兄皇子と皇位」薗田香融編『日本古代社会の史的展開』　塙書房　p.66
6　森公章　2016『天智天皇』　吉川弘文館　p.188。そのほかにも白村江の敗戦からの後始末を行っていたからという説（松尾光　1999「天智天皇の称制について」薗田香融編『日本古代社会の史的展開』　塙書房　p.86）や即位式をやる間がなかったという説（篠川賢　2013『日

本古代の歴史２　飛鳥と古代国家』 吉川弘文館　p.182)、斉明の殯の終了を待っていたという説（今泉隆雄　2009「天智天皇」『古代の人物１　日出づる国の誕生』 清文堂出版　p.299）もある。

7　森公章　2016『天智天皇』 p.197

8　大平聡　2020「「中皇命」と「仲天皇」」『日本古代の王権と国家』 青史出版。初出1998

9　『寧楽遺文』中　p.366

10　『日本書紀』舒明13年10月丙午条によれば東宮開別皇子が誄をしている。

11　田中卓　1985「中天皇をめぐる諸問題」『壬申の乱とその前後』田中卓著作集５　国書刊行会。初出1951

12　水野柳太郎　1993「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」『日本古代の寺院と史料』 吉川弘文館　p.111。なお、水野氏は持統説をとる。

13　森公章　2018「野中寺弥勒像台座銘の「カイ」」佐藤信編『史料・史跡と古代社会』 吉川弘文館　p.41

14　『日本書紀』舒明天皇２年正月戊寅条によれば、「立二宝皇女一爲二皇后一。々二生二男一女一、一曰葛城皇子（近江大津宮御宇天皇）、二曰間人皇女、三曰大海皇子（浄御原宮御宇天皇）。」とある。出生順で書かれていると考える。

15　三上真由子　2005「日本古代の喪葬儀礼に関する一考察―奈良時代における天皇の殯期間の短期化について―」『奈良史学』23　p.12

16　日本古典文学大系　1993『日本書紀』下（新装版） 岩波書店。天智７年正月戊子条の注、p.367

17　このあたりの高安城などの山城の記事については、重複する記事と考える必要はないとする須原祥二氏の見解に従う（須原祥二　2020「『日本書紀』の「重出」記事―皇極紀・斉明紀・天智紀の検討―」小口雅史編『古代東アジア史料論』 同成社　p.21)。

18　今泉隆雄　2009「天智天皇」 p.301には、「天智は即位したころから、猟や宴会などの遊楽に時を過ごすことが多くなった。まだ半島では唐と高句麗の戦争が続いていたにもかかわらず、即位によって気がゆるんだのであろうか」としている。

19　上掲註１

20　森氏は倭国には唐と戦うという意識は希薄で、新羅だけが視野にあり、与しやすしと考えていたのかもしれない、としている（『天智天皇』 p.162)。

21　林重徳　2018「水城に関する土木計画・技術・構造論的考察」大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』 高志書院

22　鈴木靖民　2011「百済救援の役後の日唐交渉―天智紀唐関係記事の検討―」『日本の古代国家形成と東アジア』 吉川弘文館。初出1972　p.164

23　同上、p.171

24　葛継勇　2014「祢軍の倭国出使と高宗の泰山封禅―祢軍墓誌の「日本」に寄せて―」『日本歴史』790　p.13

25　大津透　2020『律令国家と隋唐文明』岩波新書　p.42

26　狩野久　2011「鬼ノ城はなぜ『日本書紀』に登場しないのか―その編集方針から推理する―」『鬼城山　国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』 岡山県総社市教育委員会　p.209

27　出宮徳尚　1984「古代山城の機能性の検討」小野忠凞博士退官記念出版事業会編『高地性集落と倭国大乱』 雄山閣出版　p.372

28　狩野久　2010「瀬戸内古代山城の時代―築造から廃止まで―」坪井清足先生の卒寿をお祝いする会『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』下、明新社も参照。
29　早川庄八　2000「律令制の形成」『天皇と古代国家』 講談社学術文庫、初出1975　p.91
30　木原克司　2016「南海道―讃岐国―」舘野和己・出田和久編『日本古代の交通・交流・情報 3　遺跡と技術』 吉川弘文館　p.135
31　亀田修一　2018「繕治された大野城・基肄城・鞠智城とその他の古代山城」大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』 高志書院　pp.301-302
32　坂本太郎　1988「天智紀の史料批判」『古事記と日本書紀』坂本太郎著作集第二巻　吉川弘文館。初出1955　p.314
33　森公章　2016『天智天皇』 p.183
34　須原祥二　2020「『日本書紀』の「重出」記事―皇極紀・斉明紀・天智紀の検討―」 p.20
35　狩野久　2011「鬼ノ城はなぜ『日本書紀』に登場しないのか」 p.209
36　赤司善彦　2019「朝鮮式山城の特徴―主に兵站と備蓄について―」『鞠智城・古代山城シンポジウム　二〇一八　成果報告書　古代山城の成立と変容』 熊本県教育委員会　p.92
37　鈴木拓也　2011「文献史料からみた古代山城」『条里制・古代都市研究』26　p.19
38　狩野久　2015「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史月報』21　p. 4
39　熊本県教育委員会　2009『鞠智城跡総括報告書』 熊本県文化財調査報告第249集　p.150。また、木村龍生氏はすでに地元によって築城されていたため『日本書紀』に築城記事が出てこないのではないかと説明している（木村龍生　2018「鞠智城の築城とその背景」大宰府史跡発掘50周年記念論文集刊行会編『大宰府の研究』 高志書院　p.375）。
40　木村龍生　2014「鞠智城の役割に関する一考察―熊襲・隼人対策説への反論―」『鞠智城跡Ⅱ　論考編Ⅰ』 熊本県教育委員会　p.113・p.116・p.121
41　五十嵐基善　2016「西海道における武具の生産・運用体制と鞠智城」『鞠智城と古代社会』 4　pp. 4－6
42　森公章　2017「鞠智城「繕治」の歴史的背景」『史聚』50　p.321。佐藤信　2014「鞠智城の歴史的位置」（『鞠智城跡Ⅱ　論考編Ⅰ』熊本県教育委員会）は鞠智城の役割を有明海との関係や隼人との関係を総合的に捉えている。
43　井上和人　2021「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代国家と都城・王宮・山城』 雄山閣。五百旗頭真　2012「東アジア国際関係の中の白村江の戦い」『成果報告　鞠智城東京シンポジウム　古代山城鞠智城を考えるⅡ　東アジアの中の古代鞠智城』 熊本県教育委員会。